

な ミリ子は泣かない

寺村輝夫・作

頓田室子・え



創作子どもの本

ミ
リ
子
は
泣
か
な
い

寺村輝夫・作 頼田室子・え



ミリ子は泣かない

創作子どもの本

初版発行／1978年11月©

第2刷発行／1979年4月

著者／寺村輝夫

発行所／株式会社 金の星社

〒111 東京都台東区小島1丁目4-3
電話／東京03-861-1861（代表）
振替／東京0-64678

印刷／（有）協栄印刷
製本／東京美術紙工

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛に送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

913 寺村輝夫

ミリ子は泣かない

金の星社 1979

181 P 22cm （創作子どもの本）

基本カード記載例

8393-041231-1406



はじめに

ドッジボールや

ソフトボールをやるのが

あそびなら、

本を読むこともあそびの一つだ。

この本は、

だから、あそびのつもりで読んでほしい。

あそびには頭をつかわなくてはならない。

そして、この本を読むにも……。

■ もくじ

松岡はじめくん 7

ミリ子とセンコウさん 36

プラカードとゼッケン 65



アイスクリームのたんじょう会…93

カブトムシ事件^{じけん}……………124

ピッチャーがんばる……………152

あとがき……………180



作者・画家紹介

作者・寺村輝夫（てらむら てるお）

1928年，東京に生まれる。早稲田大学卒業。主な著書に毎日出版文化賞の『ぼくは王さま』をはじめ『王さまばんざい』『アフリカのシユパイツァー』『しまったおじさんわすれもの』『ミリ子は負けない』などがある。

画家・頓田室子（とんだ さやこ）

1934年，長崎県に生まれる。武蔵野美術大学油絵科卒業。一陽会々員，日本美術家連盟会員。一陽会特待賞，一陽会賞，東廊主催千人展優勝などを受賞。主な児童図書のさしえに『ミリ子は負けない』『赤い月』などがある。

創作子どもの本

ミリ子は泣かない

寺村輝夫



松岡はじめくん
まつおか



友行^{ともゆき}が、はじめてその子にあったのは、三学期^{がっき}がはじまった日だった。あった、というよりは見たといった方がいいかもしれない。

今年のお正月は、あたたかだった。

学校からのかえりに、ジャンパーをわすれたくらいだった。教室^{きょうしつ}にとりにかえたので、クラスの友だちは、みな先にかえってしまっ

った。
友行はひとりだった。

学校のうらにあるクヌギ林のわきの道をとおり、だらだら坂をおりて、小さな橋をわたる。きよ年の冬は、川のふちがこおっていたのを思いだす。が、今年は氷などない。よく晴れ上がった空のいろが、そのまま水にうつっているようだった。

その時、商店街の方から、あの子がやってきたのだ。おかあさんに手をひかれて、ぶあついセーターをきた上に、毛がわのついたジャンパーをきて、もともと太った男の子だった。どうしたわけか、口をあけたままで、目ばかりが、きよきよと動いていた。前のめりの歩きかただった。が、あごをつきだしているのがきみようだった。

——なんだ、あいつ。頭がおかしいんじゃないか——。

友行は思った。

五年生だろうか、いや、おかあさんに手をひかれているから、三年生か。それにしても体が大きい。

——きょうから学校がはじまったのに、学校とははんたいの方からやってくる——。

ちがう学校へいつてるのかもしれない、と友行ともゆきは思おもった。

友行は、しばらく見つめていた。すると、おかあさんが、にこつと友行にわらいかけてきた。めがねをかけた、やさしい感かんじのおかあさんだ。

友行は、なんだかはずかしくなつて、目をそらした。そして、いそいで歩きだし、家にかえった。

その子が、なんと、四年一組くみの友行のクラスに転校てんこうしてきたのだ。

あくる日、佐藤先生に、まるでだきかかえられるようにして、教室にはいつてきた。

友行は、電氣にふれたように、びっくりした。

——あ、あいつが、一組に——。

佐藤先生は、いった。

「さあ、みんな。新しい友だちを、しょうかいしますね。」

その子は、頭を上げようもしない。みんなの方をむこうもしない。

「松岡はじめくんっていうの。松岡くんは、小さい時に病氣したもので、みんなとは、ちょっとちがうところがあるかもしれない。五年になったら、松岡くんのような子どもがはいる。わかば学級に行くことになるけど、しばらくは、この一組であずかることになつ



たの。病氣びようきではあつても、松岡まつおかくんはみんなと同じおななのよ。ばかにしたり、いじめたりしないこと。やくそくできる？」

そういわれても、すぐに返事へんじをするものがなかった。

松岡くんは、ドアのそばへ行つて、しゃがみこんだ。とうとう、みんなの方をむかなかつた。

佐藤さとう先生は、

「みんなの勉強べんきやうのじゃまにならないように、松岡くんは、一ばんうしろにすわってもらいましようね。」

いつて、また松岡くんの手をとろうとした時ときだった。

「先生しつもんっ。質問しつもんっ！」

こういう時、きまって口をきるのが、ミリ子だ。みんなは、いっせいにミリ子を見た。

「先生。なぜ、にもつみたいに、あずかるっていうんですか？ 松岡くん、かわいそう。にもつじゃないわ。四年一組の、ちゃんとした人間よ。」

佐藤先生は、いわれて顔をひきつらせた。目が、いつもよりもっと大きく開いた。

「ごめんなさい。」

自分が悪いと思ったら、すぐあやまるのが、先生のいいところだ。でも、ときどき、かんちがいをするのがこまる。

「……そうね、小林みち子さんも、転校生だったわね。夏休みがおわった時に、このクラスにきたのね。でも、あなたはもう、すっかりなれてるわ。だから、たのみます。松岡くんも、みち子みたいだといんだけど。」

ミリ子——。本名は小林みち子。先生がそうだったので、みんな

は、あ、そうか、ミリ子はみち子っていうんだと気がつくくらいだった。クラスのだれもが、小林さんとかみち子さんなどとよばない。もしかすると、クラス一の人気ものかもしれない。

ミリ子は、このクラスにはいつてまだ四か月にもなっていないのだ。クラスで一ばんちび。センチよりちびだから、ミリ子という。けれども、かみの毛はクラス一長く、えくぼはクラス一ふかく、目がクラス一大きい。

先生よりも大きな目をひかせて、

「先生っ。松岡くん、どんな病気が知らないけれど、にもつをあずかるみたいになっちゃ悪いわ。わたしがいいたいのは、そのこと。」

佐藤先生は、こんどは、白い顔を赤くした。おけしようにしてい